

特別シンポジウム開催結果について

2014年11月26日
政策・コミュニケーション部

1. 日 時 : 2014年11月18日(火)13:00-17:00
2. 場 所 : 東海大学 校友会館 阿蘇の間・朝日の間 (東京 千代田区)
3. テーマ : 「コミュニケーションの重要性 - 原子力の理解に向けて 女性の視点から - 」
基調講演 : 「感性コミュニケーション ～脳が創り出す男女のミゾ」
黒川 伊保子氏 : 株式会社 感性リサーチ 代表取締役
パネルディスカッション
(モデレーター)
長谷川 聖治氏 : 読売新聞 科学部長
(パネリスト)
越智 小枝氏 : 相馬中央病院内科診療科長
中村 多美子氏 : 弁護士
武田 美亜氏 : 青山学院女子短期大学現代教養学科人間社会専攻准教授
*黒川氏もパネリストとして参加。
4. 参加者数 : 149名 (内女性102名)
5. 概要
 - ・今回は原子力の理解に向け、女性の視点から考察する場を設け、今まで比較的原子力産業界とのつながりの少ない、新鮮な様々な分野の専門家を登壇者として迎えた。
 - ・基調講演のポイントは以下の通り。
 - 女性と会話をする上で「相手の言葉の反復」と「共感」が重要
 - 女性脳は臨機応変力があり男性脳は俯瞰力がある。
 - 女性は男性社会で、社会を大きく包む役割を担うことが出来る。
 - ・パネルディスカッションのポイントは以下の通り。
 - 過去の原子力安全のコミュニケーションは男性目線(上から目線)であった。
 - 当事者意識持つために価値観を共有すること、その為の信頼が大事。
 - 原子力事故により、放射線に留まらない様々な生活レベルでの問題が起きている。

詳細は以下の通り。

<基調講演パート>

- ・「脳は装置である」という見立てをすると、男女のミゾが見えてくる。
- ・女性と会話をする上で「相手の言葉の反復」と「共感」はいわば“通信プロトコル”である。
- ・女性脳は過去の全てを一瞬で思い出す。情動（心の動き）をきっかけに過去の体験が一気に脳裏に展開して再体験する。また、女性脳は“察してなんぼ”であるが、男性脳は察する能力が抑え込まれる。
- ・男女の脳の違いは脳梁の太さの違いによる。女性脳は臨機応変力があり男性脳は俯瞰力がある。
- ・女性脳は共感してくれた相手に愛着がわく。男性脳はとりとめのない話に耐性が低い。男性脳を開く“通信プロトコル”は「結論から言う」「数字をいう」。
- ・男性社会に女性を迎え入れた場合、女性は男性のように頑張るのではなく、女性として社会を大きく包む役割を担うことが出来る。

<パネリストディスカッションパート>

1. モデレーター総括

- ・これまでの原子力安全のコミュニケーションは男性の目線、上から目線のコミュニケーションであった。今日は女性の視点から、男性からは出ない意見がいくつも出た。例えば、甘えても良いという視点もこれからは大事と思う。
- ・当事者意識を持つために価値観を共有することが大事。その為には信頼が大事。これからここにいる方々が中心となって、原子力関連のコミュニケーションの実験を進めてほしい。
- ・多様な意見を一つにまとめることを無理にせず、色々な感性で対処しながらコミュニケーションをはかっていくことが大事。
- ・福島にはまだ避難生活をしている方々がいるので、そういう方々に思いをはせながら原子力問題を今後も考えていきたい。私自身、メディアの立場で正確性、公平性、迅速性をコミュニケーションの柱にしているが、改めて人間的な視点、同じ目線での情報提供、原子力事故の問題は放射線だけでない色々な生活のレベルでの問題があることを学んだ。

2. パネリストからの主な意見は以下のとおり

【女性は何故原子力を不安がっているのか？】

(黒川氏)

女性は数字では腹に落ちないところがある。信頼しないのではなく、信頼を培う過程が違

う。必要以上に原子力を怖がっていることはないと思う。

(越智氏)

不安というより、話し方の問題。例えば「いつから山菜が食べられるんですか」という問いに対して、正確にものを言おうとして何も答えられなくなるよりも「食べちゃいなよ。でもね、」と言ってから話し始めれば違う。

(中村氏)

男女差は確かにあるが、低確率事象に対する物事の捉え方に差はないと思う。地球温暖化の最悪シナリオとテロによる最悪シナリオを費用便益分析をしていくとそれほどの違いはない。しかし、9.11の場面を目撃すると過剰反応と確率無視ということが起きる。このように、想起容易性にとらわれて冷静な分析が難しくなることは男女に関わらず実生活の中にも沢山ある。

(武田氏)

不安が多いというアンケート結果に対して、本当に正直に不安を表現しているかという視点もある。男性は不安を表現しにくいというような、答え方のバイアスがかかっている可能性もあるかもしれない。

【原子力のコミュニケーションには問題があったのか？】

(越智氏)

結果として失敗したから悪いということではない。失敗からいかに学ぶかが大事。社会責任としてのコミュニケーション、つまり“この人たちを幸せにしてあげるにはどうすれば良いか”という観点でのコミュニケーションが大事だ。

医者とのコミュニケーションは、顔色を見ながら話をすることはある。決めて欲しい人と、自分で決めたい人（既に決めているけど言わない人）がいる。1対1のコミュニケーションでは言い方を変えられるが、そのようなバリエーションが少ないという印象。

(中村氏)

原子力の専門家は専門性の中に閉じこもってしまっているのではないか。集団の外に一歩出てコミュニケーションしてみることが大事だ。専門家同士のコミュニケーションの問題もある。

弁護士は他人の意思決定に当事者として関与する。そういうときには、必ずメリットとデメリット、最悪のことも話す。集団に対するインフォームド・コンセントが必要。

(武田氏)

伝える側の努力だけでは伝わらない。欠如モデルの話をしたが、知る側の知識も必要だ。

(黒川氏)

お上から下々へのコミュニケーションではなく、市民の側に当事者感を持ってもらうための工夫が必要。

【情報提供側が信頼されるために何が必要か？】

(中村氏)

情報提供のプロセスが重要。結論のデータの出所、根拠、収集手段、まとめる過程、その履歴が残っているか、というようなプロセスが透明であることが信頼されるために大事。過程の蓄積の可視化の一つのモデルとしてウィキペディアが挙げられる。

(武田氏)

現時点で「原子力関係者は信用できない」とステレオタイプ化して見てしまっている人の信頼を取り戻すのは難しい。すぐに結果は出ないが、一步一步モチベーションを保ちながらやっていくことが大事。伝える側も人間なので自分を奮い立たせるだけではなく時々弱いところを見せても良い。人間同士の対話ということをお互いに分かることが大事。

(黒川氏)

名札に「趣味：社交ダンス、好物：麻婆豆腐」と書いてあるだけでもなんとなく人間性を感じる。ささいなことにきっかけがあるかもしれない。情報提供側のモチベーションも心配。強硬な反対派をイメージしてはモチベーションを保てない。好意的な人をイメージしないと相手のことを考えられない。共感してもらえるような人達をイメージターゲットにして、楽しい気持ちで原子力を語る事が大事。

<今後の展開>

- ・引き続き、原子力への理解につながる活動を継続する予定（詳細は別途検討）。

以上